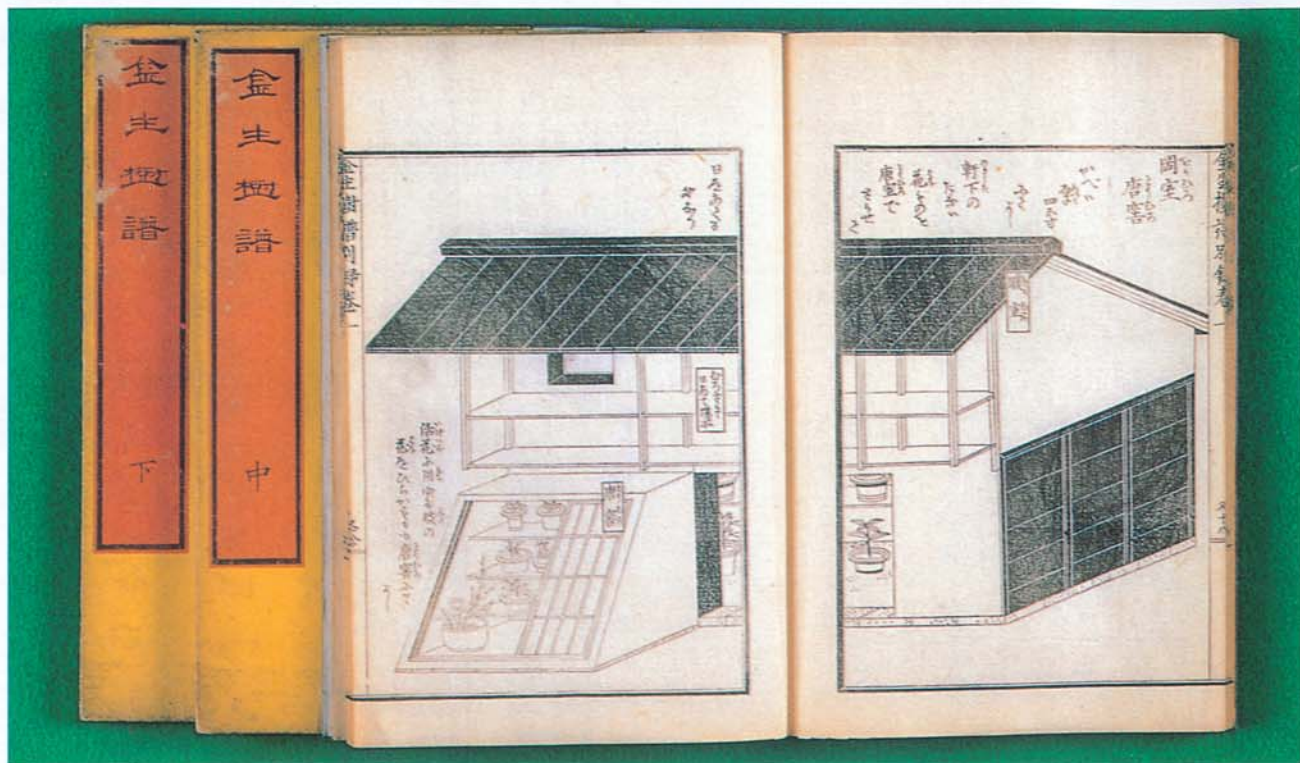


鉢と植物の調和を示し
愛と好とを語る

「金生樹譜」

雑花園文庫蔵



「金生樹譜」長生舎主人（栗原信允）著。天保4年、江戸須原屋佐助刊。上巻見開き、岡室、唐壺の図および中・下巻の全3冊

「金生樹譜」かねのなるきのふ、とも読む。江戸後期の園芸書。上巻には盆栽について図説されている。すなわち、鉢栽培の盆は人の衣服のごとく、書画の表装のごとし。植えられた植物との調和が大切であり、出来不出来にも通じると盆の大切さを示し、さらに観賞するうえで敷板、台、棹、棚の種類と選び方、遠地への運搬用の箱も図示されている。

栽培法では屋外の栽培棚、冬越しの室内用の唐壺、屋外での大がかりな岡室の造り方、取り扱い上の注意、暖房の方法を述べ、外来植物など暖地性植物の冬越し、鉢花、草花、切枝物の促成など当時の進んだ技術が紹介されている。

中巻は松、柳、梅の各地の銘木の図説、下巻は接ぎ木、取り木、挿し木、実生、培養土、園芸用諸道具を図解。園芸書として今日的編集と同様であるが、上巻末尾に面白いことが記されているので紹介する。

「凡物を愛すると好とは同じことのやうなれど少し違ふなり。愛はなほだしくしては必ず偏になり、好盛にしては必ず妙に至る。其故いかにと云ふ愛する人はただその花葉の美を喜ぶのみにして其花木の性を考へ、その養ふ志をつくすに及ばず（中略）好人のころはずつと替たもの、まづ第一に草木の性をよく考へ山にあるもの野にあるもの各々その土こしらへに心をつくし、又暖国と寒国との氣候を丁寧（けんぜん）に懸断し南海の草を東海の暖室に養ひ彼をして東海たることを忘れ本国のまゝに繁昌さするは、さりとては好の妙神に通ずと云ふべし、これ近ごろ餘計の冗言ながら筆の序にしるす」（内著者補）



下巻見開き。草ものの接ぎ木図



上巻見開き。盆の色々（阿蘭陀産もあり）